

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(S)

研究期間：2017～2021

課題番号：17H06115

研究課題名（和文）言語系統樹を用いた琉球語の比較・歴史言語学的研究

研究課題名（英文）Comparative historical research on Ryukyuan by using linguistic family trees

研究代表者

狩俣 繁久 (Karimata, Shigehisa)

琉球大学・戦略的研究プロジェクトセンター・産学官連携研究員

研究者番号：50224712

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 135,600,000円

研究成果の概要（和文）：琉球諸語と九州方言の系統関係の解明を目指して集団遺伝学を取り入れた言語研究を進めた。琉球諸語と九州方言の資料を集団遺伝学の手法で数列化して系統ネットワーク図やADMIXTUREを描き、その結果を地図上にプロットした言語地図を加えて検証し琉球諸語の系統研究に集団遺伝学が有効であることを確認した。南琉球語の中の宮古語と八重山語が従来説よりも近い関係にあり、逆に与那国語がこの2者から離れていることを明らかにした。動詞のアスペクト・テンス体系と、稲作に関わる等の基礎語彙について北琉球語と南琉球語と九州方言を比較し、琉球諸語の南北差が九州からの人の移動の波が2回あったことによるという仮説を導き出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

比較言語学も言語地理学も少数の単語を使って言語史を解明する。そこには単語の選択に恣意性が働く懸念が付きまとう。比較言語学は2地点間の関係を明らかにするだけである。集団遺伝学は対象地点数にも使用する単語数にも制限が無い。系統ネットワーク図は分岐だけでなく地点間の距離や言語接触の様も可視化できる。GISデータを組み込めば系統ネットワーク図等から言語地図を描ける。集団遺伝学的研究の確立は琉球諸語と日本語方言の研究に大きな革新をもたらす。

研究成果の概要（英文）：The aim of the project has been to uncover the phylogenetic relationship between the Ryukyuan languages and Kyushu dialects by using methods applied in population genetics. The methods include transforming various linguistic information of these languages into numerical sequences, plotting the information as genetic network figures and ADMIXTURE and combining them with geolinguistic maps. The results show that of the three Southern Ryukyuan languages, Miyako, Yaeyama and Yonaguni, the former two constitute a subgroup against Yonaguni, against the general consensus that the latter two constitute a subgroup. Another finding is about grammatical and lexical differences (tense-aspect systems and vocabularies of rice cultivation) between Northern and the Southern Ryukyuan languages in a diachronic perspective. Such differences may support our hypothesis that there were two waves of massive migration from Kyushu to the area where Northern Ryukyuan was spoken.

研究分野：言語学

キーワード：琉球諸語 九州方言 比較歴史言語学 集団遺伝学 言語系統樹

### 1. 研究開始当初の背景

琉球諸語は、日本語史研究において重要な位置を占めることが知られるが、既存の研究は、奈良期中央語と琉球諸語の一部の下位方言の、少数の単語を用いた比較言語学的研究であった。琉球諸語に隣接する九州方言との歴史的な関係も示唆されていたが、両者に共通する言語要素が九州琉球祖語に遡るのか、あるいは、九州琉球祖語から分岐した後のグスク時代開始期（十世紀頃）までの貝塚時代の期間の言語接触によって持ち込まれたものなのか、1609年の薩摩藩による琉球国侵略以降の近世期の言語接触によって持ち込まれたものか、具体的な言語資料に基づく研究がなかった。琉球諸語の下位言語間の系統関係の研究も同様の状況にあった。

研究代表者・狩俣繁久の所属する琉球大学の研究室に琉球列島の伝統的集落818地点の言語地理学的な調査資料（基礎語彙200語350項目から成る調査票）が保存されていた。同じく沖縄県と奄美地域の全ての市町村と全ての離島から1地点ずつ選定した100地点の調査資料（1100語の基礎語彙から成る調査票）も保存されていた。研究代表者は手書きで記入された調査資料のデータベース化を進めていた。

言語地理学から得られるものは大きい。しかし、言語地図は1言語要素を記号化して1枚の平面図に描き、その地理的分布から単語と地域の歴史を明らかにすることを主たる目的にする。したがって、言語地図では言語体系の史的展開過程を可視化することも離れた複数方言間の系統関係、琉球諸語全体の系統関係を可視化することも難しい。

言語地理学的研究のために収集された上記の言語資料は、一定期間（1980年～1992年）に収集された大量かつ均質な資料であることから集団遺伝学の解析に適しており、これを用いて集団遺伝学的研究を実施できれば、日琉祖語から分岐し琉球列島に拡散・定着した琉球諸語の歴史を時間と空間の三次元の座標軸上の動態として表現できると考えて、樹形図と系統ネットワーク図を試作した。その解析の結果をこれまでの琉球諸語研究の成果に照らして検証し、描画された系統ネットワーク図やクラスター分析（ADMIXTURE等）を活用すれば、琉球諸語の系統研究を進展させることが可能であり、大きな成果を得ることができることを確認した。そして、本格的な集団遺伝学による言語研究の準備を進めていた。

### 2. 研究の目的

上記の言語資料に九州方言の言語資料を外群として加え、集団遺伝学の手法で描画した系統ネットワーク図やクラスター分析（ADMIXTURE等）を琉球諸語に関する比較言語学、記述研究の知見に基づいて検討し、琉球諸語が日琉祖語から分岐したのち、琉球列島に拡散して現在の言語的状況がどのように生成されてきたかを明らかにするとともに、琉球諸語内部の系統関係を明らかにする。琉球諸語と九州方言の歴史的関係を検討し、琉球諸語と九州方言の重層的な繋がりを明らかにする。九州以北の本土方言には無く琉球諸語と九州方言の共通要素の分布を割り出し、九州琉球祖語の可能性と近世以降の九州方言の影響を解明する。あわせて、日琉祖語の系統関係の研究手法として集団遺伝学による言語研究を確立する。

### 3. 研究の方法

言語は言語的特性の大きく異なる音韻、語彙、文法の3分野から成る。この音韻、語彙、文法の3分野は系統特性も異なる。音韻の変化は話者にも気づかれずゆっくり進行する、正の淘汰にも負の淘汰にも関わらない中立変化である。文法体系は閉じた体系をなし保守的である。既存の活用形と競合する外来の活用形は、その文法的意味が同じなら、外来の形式に負の淘汰が働く。文法における新形式は、内的な変化によって生成されるが、語彙における新語の創出よりはるかに少ない。語彙の体系は開かれていて、単語間の結びつきも弱く、借用語や新語が加わることも既存の語彙に置き換わることも多い。

本研究で解析に用いる上記の言語資料は借用語に置き換えにくい基礎語彙である。これを使用して音韻と語彙について琉球諸語を中心に九州方言を加えた集団遺伝学的研究を行った。

音韻の解析については、国際音声記号で表記された単語を音素に区切り、子音音素を調音点、調音方法、口蓋音化・唇音化の有無、喉頭化の有無、声門状態の6項目についてその音素素性を0と1で数値化し、母音音素を長短、開口度、舌の位置、円唇性の有無、無声化と鼻音化の有無の6項目についてその音素素性を0と1で数値化し集団遺伝学の手法で系統ネットワーク図とADMIXTUREを作成する。さらに系統ネットワーク図の枝端やADMIXTUREの列をGIS配置した言語地図も描画する。それらを琉球諸語の研究成果に照らして分岐や系統関係の尤度を検討する。

語彙の解析については 1100 語の基礎語彙の同義性を基準にして単語群ごとに単語を分類し、個々の単語群ごと同根性（同源性）を 0 と 1 に数値化したうえで同一の単語群を統合して解析する。さらに、1100 語の基礎語彙を身体、親族、道具、動植物、代名詞、数詞などの意味分野別に分割して解析し、分野ごとに、あるいは、統合して、系統ネットワーク樹と ADMIXTUR を描画する。さらにそれを言語地図に描画する。それらを琉球諸語の研究成果に照らして分岐や系統関係の尤度を検討する。

#### 4. 研究成果

200 語の基礎語彙から祖型を共通に持つ 1 音節語と 2 音節語をアトランダムに 97 語選びだして描画したのが下の系統ネットワーク図である。地点は地域ごとの偏りが少なくなるよう原則として各自治体から 1 地点、各離島から 1 地点の 85 地点を選定した。ただし大きくて 30 集落ある喜界島や加計呂麻島、および琉球諸語のなかで重要な位置を占める最西端の与那国島等は複数地点を選定した。解析に際しては音素の位置する語頭、語中を区別していない。なお、この系統ネットワーク図は実際には 3 次元の立体だが、2 次元に転写して表現している。

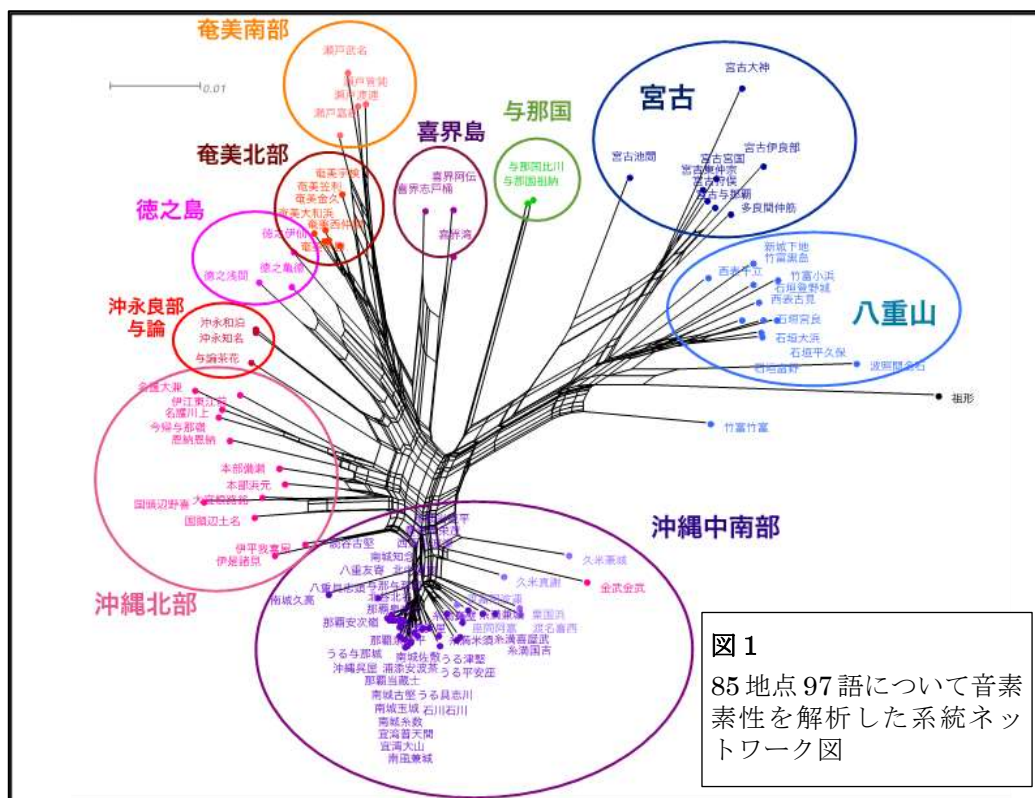


図 1  
85 地点 97 語について音素素性を解析した系統ネットワーク図

この系統ネットワーク図から、次のことが分かる。

- (1) 北琉球語（奄美、沖繩）と南琉球語（宮古、八重山、与那国）の二つに分かれている。
- (2) 奄美大島が奄美北部と奄美南部に分かれている。
- (3) 徳之島が奄美大島の近くに分岐している。
- (4) 喜界島、沖永良部島、与論島のそれぞれが北琉球語の中で独立性が高く分岐している。
- (5) 沖繩語のなかで沖繩本島中南部の各地点は枝長が短く近似的な下位方言が密集している。
- (6) 南琉球語の中で与那国語が宮古語だけでなく八重山語からも大きく離れている。
- (7) 南琉球語の中で八重山語と宮古語が近い関係にある。

上の (1) (2) (3) (5) の結果は、これまでの琉球諸語研究の知見に合致するものであるが、(4) (6) (7) の結果はこれまでの知見と若干異なる。喜界島、沖永良部島、与論島の位置づけを巡っては奄美語の下位方言にする説と沖繩北部方言との共通性を重視して統合し国頭語とする説がある。しかし、上の図で見ると喜界島が奄美に若干近いものの、徳之島と奄美大島との近さに比べると離れている。沖永良部と与論は奄美からも徳之島からも離れていて、これを奄美、徳之島と統合させるほどではない。一方で沖繩北部にも近づいているが、これも統合させるほどではなく、奄美大島・徳之島と沖繩中南部の間に沖永良部と与論と沖繩北部が独立して並んでいるとみるのが穏当である。与那国と八重山の関係についても与那国を八重山の下位方言にする説と独立させる説があるが、図 1 はどちらの考えも支持しない。

図 1 は先行研究が示す方言区画に重なる。しかし、方言区画では示せない地域毎のまとまりや地域間の関係の遠近や親疎を分枝の枝長や端点の距離等で可視化させている。

下の図 2 は 200 語の基礎語彙から「風、肝、雲、毛、声」の 5 個の単語を選定し、\*k を含む語頭の音節 \*ka、\*ki、\*ku、\*ke、\*ko の地域ごとの変種を統合したクラスター分析の結果を ADMIXTURE に描画したものと、ADMIXTURE の列を円グラフにして描画した言語地図である。同様に、「花、火、船、へら、骨」の \*p を含む語頭の音節 \*pa、\*pi、\*pu、\*pe、\*po の解析結果の ADMIXTURE と言語地図、さらに、両方を統合して分析した結果の ADMIXTURE と言語地図を描画して検討した。この解析には外群として鹿児島県十島村の宝島方言と熊本県天草方言を加えている。

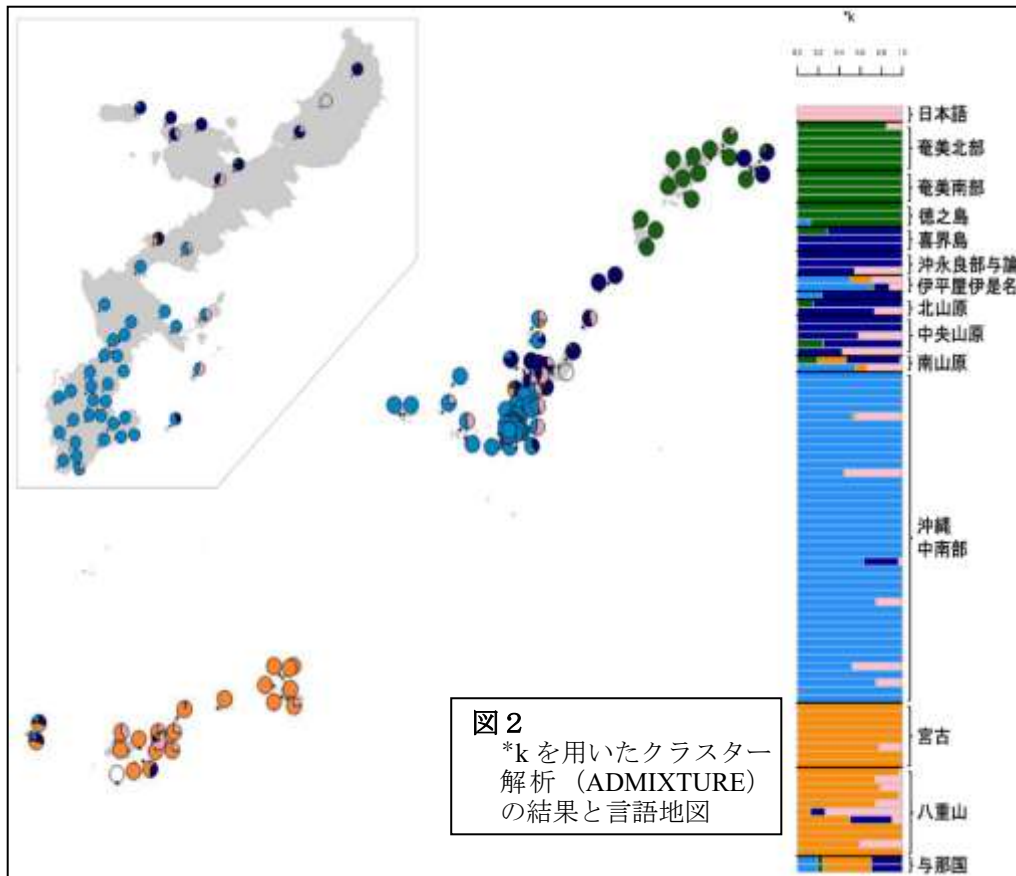


図 2  
\*k を用いたクラスター  
解析 (ADMIXTURE)  
の結果と言語地図

このクラスター分析 (ADMIXTURE) と言語地図から、次のことが分かる。

- (8) 外群として加えた九州の宝島と天草の方言が琉球諸語と大きく異なる
- (9) 琉球諸語に関しては図 1 の解析結果とほぼ同じ分岐を示す。
- (10) 解析の対象を \*k、\*p、\*k+\*p に限定しても、アトランダムに選定した単語の全ての音素を統合しても類似的分岐と分布の結果が得られる。

上の (8) の結果は琉球諸語が日本語 (九州方言) と大きく異なるという定説を支持するものである。(9) の結果は解析対象の音素を特定しない解析でも特定の音素に制限した解析でも有効な結果が得られることが分かる。以上の研究によって次のことが確認できた。

- ① 同じ方言資料を使用して系統ネットワーク図の描画、クラスター分析 (ADMIXTURE 等の描画)、その結果を地図上にプロットした言語地図の描画が可能である。
- ② 琉球諸語の歴史的展開を 3 次元 (系統ネットワーク図と言語地図) に表現可能である。
- ③ 均質で多量の方言データを使用すれば単語の言語的特性にしたがって選定した要素 (\*k、\*p) を用いた解析も、それを統合した解析 (図 1、\*k+\*p) も可能である。
- ④ 集団遺伝学の方法として音韻を用いた研究が可能である。

\*ki>tʃi、\*p>h 等の音韻変化は多くの言語に広く見られるので、音韻を指標にした樹形図や系統ネットワーク図は系統研究には適さないという見解がある (Pellard Thomas (2018) )。たしかに \*ki>tʃi、あるいは、\*p>h の音韻変化だけを個別に取り上げれば、離れた地域で \*ki>tʃi、\*p>h の音韻変化を反映した語形が見られるので、これだけをもって系統関係を判断することは難しい。



しかし、琉球諸語のばあい、\*iと結合する\*kはtfだけでなく、kのままの下位方言もk'やt<sub>ɟ</sub>やjの現れる下位方言もある。語頭の\*kiが音消失する下位方言もある。\*aと結合する\*kがkのままの下位方言も、hやk'に変化する下位方言、\*uと結合する\*kがkのままの下位方言、k'p'に変化する下位方言、語頭の\*kuが音消失する下位方言がある。e、oについても同様で、結合する母音の韻質の違いによっていろいろな変種が現れる。\*pも同様に結合する母音の韻質の違いによってさまざまな変種が現れる。これらの変種の現れ方は琉球諸語に固有のものである。ほかの子音(t、b、g、m、n)でも同様に母音の韻質の違いによって様々な変種が現れる。その現れ方は子音毎に違う。母音に着目してもa、i、u、e、oでも変種の現れ方は母音毎に違う。これらの現れ方は琉球諸語に固有のものであり、個々の下位方言毎に固有のものである。

本研究では、\*kと\*pを韻質の違う母音\*a、i、u、e、oと結合させた音節を解析の対象にし、5個の音節を統合して解析した。\*k、\*pの解析結果も、\*kと\*pを統合した解析結果も、選定した97語の全ての音素を統合した解析結果も先行研究の示す方言区画に近似的なものである。音韻を指標にした集団遺伝学が琉球諸語の系統関係を解明する研究方法として有効であることが確認できる。

稲作文化の根幹をなす「稲、米、飯」の語彙についてその語形の変種がどう分布するかを検討した(狩俣繁久(2019))。九州から遠く離れた南琉球語(与那国、八重山、宮古)では「稲、米、飯」を区別せず mai 系の単語が現れる。いっぽう、北琉球語(奄美、沖縄)では九州以北の本土方言と同じく「稲、米、飯」の3者を区別すると同時に iné (稲)系と kome (米)系の語形が現れる。ただし、北琉球語の中でも与論島方言では3者を区別せず mai 系の単語が現れ、沖縄北部でも mai 系の単語の現れる下位方言が散在する。

南琉球語の mai は漢字「米」の呉音である。漢字音には呉音、漢音、唐音があるが、呉音は日本に持ち込まれた漢字音の最も古い発音である。「稲、米、飯」を区別する「いね、こめ、いひ」の和語は稲作が日本に持ち込まれたのち発生したものである。

南琉球に見られる「稲、米、飯」を区別しない呉音 mai 系の語形は、和語が生まれる前段階のもので、北琉球語に見られる3者を区別すると同時に iné (稲)系と kome (米)系の語形は和語が生まれた後のものである。日琉祖語には3者を区別しない呉音の mai 系の語があり、それが琉球列島に持ち込まれて南琉球に到達した。日琉祖語から琉球祖語が分岐したのちに、日本祖語で3者を区別する和語が発生して九州から琉球列島に持ちこまれたが、九州に近い奄美、沖縄に留まり、南琉球には到達しなかった。北琉球(沖縄北部や与論)に mai 系が散在するのはかつて北琉球にも mai 系の語が存在した痕跡である。「稲、米、飯」の語形に見られる琉球諸語の南北差は、九州から琉球列島への大きなヒトの移動の波が2回(呉音 mai 系の単語をもった言語集団の移動、3者を区別する和語系の単語をもった言語集団の移動)があったことに由来するという仮説が導き出されるのである。

音韻とは系統特性の異なる語彙を指標に用いた研究も並行して進めた。語彙は開かれた体系をなし新語や借用語を発生しやすい系統特性を持つ。語彙の内部に目を向けると、形容詞語彙よりも動詞語彙が保守的で、年下の親族名称よりも年上の親族名称が変異の幅が大きいなどの傾向がある。自然天体の「風、雲、海、波、山、星」等の語は日琉祖語に共通する語が多く変種も少ない。数詞は、「一つ」から「十」までは和語系で「十一」以上は漢語系が現れ、「一人、二人」は和語で「三人」以上は漢語が現れる等、語彙の小体系ごとに、あるいは単語によって、変種の現れ方が異なる。そこで、1100語の単語から自然・天体、時間、道具等の意味分野の名詞と数詞を300語選定して解析を行った(狩俣他(2022))。系統ネットワーク図とクラスター分析の結果は図1と図2と細かな分岐の違いは見られるなかで、南琉球語の中の与那国語と八重山語が近い関係にあり、宮古語がこの2者から離れていることが目に付く。これは図1や図2の結果と大きく違う。解析する意味分野を増やし、その理由を解明することが課題だが、音韻と語彙が異なる結果を示すのは異なる系統特性ゆえのものであり、言語接触の有無や地理的特性(遠近や政治的区分等の影響)を考慮した検討が必要である。また、音韻と語彙による系統関係に相違があることの検証には、この2者と大きく系統特性の異なる文法を指標にした琉球諸語の集団遺伝学が不可欠であること、琉球諸語の下位言語間、および九州方言との言語接触の影響を考慮しなければならないことを確認した。

【参照文献】狩俣繁久(2019)「言語接触がもたらした琉球語の南北差」『方言の研究』5号、5-23、日本方言研究会。／狩俣繁久、和智仲是、木村亮介(2021)「琉球諸語研究における方言系統地理学の可能性」『フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史』129-162、開拓社。／狩俣繁久、和智仲是、木村亮介、岡崎成生、大城璃功「語彙の分布から見る琉球諸語内の系統関係解明の可能性」『言語系統樹ワークショップ』、沖縄県立博物館・美術館、2022.12.25。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計54件（うち査読付論文 29件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 22-1
2. 論文標題 琉球語幸喜方言の擬声擬態動詞	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語文法	6. 最初と最後の頁 4-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 3
2. 論文標題 宮古語の仮名文字表記法	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 シマジマのしまくとぅば	6. 最初と最後の頁 207-246
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 3
2. 論文標題 沖縄語名護市饒平方言の焦点構造とモーダルな文のタイプ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 シマジマのしまくとぅば	6. 最初と最後の頁 116-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 6
2. 論文標題 語構成からみた幸喜方言の形容詞	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 琉球方言研究	6. 最初と最後の頁 251-262
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白田理人	4. 巻 9
2. 論文標題 北琉球奄美喜界島北方言の確認要求表現 - 視覚動詞命令形由来の形式を中心に -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 西日本国語国文学会	6. 最初と最後の頁 30-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久、和智仲是、木村亮介	4. 巻 -
2. 論文標題 琉球諸語研究における方言系統地理学の可能性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史	6. 最初と最後の頁 12-184
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Matsunami M, Koganebuchi K, Imamura M, Ishida H, Kimura R, Maeda S	4. 巻 38
2. 論文標題 Fine-scale Genetic Structure and Demographic History in the Miyako Islands of the Ryukyu Archipelago	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Molecular Biology and Evolution	6. 最初と最後の頁 2045-2056
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 2
2. 論文標題 宮古島市平良西里方言の格ととりたて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 シマジマのしまくとぅば	6. 最初と最後の頁 152-184
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 2
2. 論文標題 沖縄県石垣島石垣市石垣方言の名詞と形容詞	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 シマジマのしまくとぅば	6. 最初と最後の頁 185-213
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 7
2. 論文標題 生態学としての琉球語研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 琉球アジア文化研究	6. 最初と最後の頁 1-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久, 和智仲是, 木村亮介,	4. 巻 -
2. 論文標題 琉球諸語研究における方言系統地理学の可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史	6. 最初と最後の頁 129-162
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 42
2. 論文標題 沖縄語那覇方言の焦点助詞と情報構造	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 南島文化	6. 最初と最後の頁 103-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 白田理人	4. 巻 42
2. 論文標題 奄美大島今里方言の埋め込み疑問文について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 南島文化	6. 最初と最後の頁 151-164
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 -
2. 論文標題 琉球語の起源はどのように語られたか - 琉球語と九州方言の関係を問う -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語「起源」論の歴史と展望 - 日本語の起源はどのように論じられてきたか	6. 最初と最後の頁 227-249
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木部暢子	4. 巻 -
2. 論文標題 諸方言コーパスに見るモダリティ形式のバリエーション - 推量表現の地域差	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 データに基づくモダリティ研究	6. 最初と最後の頁 41-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木部暢子	4. 巻 5
2. 論文標題 日本語方言の多様性 - アクセントの地域差 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京外国語大学国際日本学研究報告	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 5
2. 論文標題 言語接触がもたらした琉球語の南北差	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 方言の研究	6. 最初と最後の頁 5-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木部暢子	4. 巻 5
2. 論文標題 奄美・沖縄の言語研究から - 奄美方言のエピデンシャリティ -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京外国語大学国際日本学研究報告	6. 最初と最後の頁 33-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木部暢子	4. 巻 96-1
2. 論文標題 疑問文の文末音調による系統内類型論の試み - イントネーション研究のために -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 3-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 4-18
2. 論文標題 感嘆文から一単語文へ、そして分節文へ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育国語	6. 最初と最後の頁 4-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白田理人	4. 巻 5
2. 論文標題 北琉球喜界島上嘉鉄方言の述語疑問詞について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 方言の研究	6. 最初と最後の頁 239-265
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 22
2. 論文標題 音素索性による系統樹作成の課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 琉球アジア社会文化研究	6. 最初と最後の頁 35-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 -
2. 論文標題 琉球語のとりたて表現	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語と世界の言語のとりたて表現	6. 最初と最後の頁 77-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 -
2. 論文標題 言語接触からみた琉球語 - 琉球語の多様性の喪失 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語接触と日本語の未来	6. 最初と最後の頁 169-188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下地理則	4. 巻 -
2. 論文標題 現代日本共通語(口語)における主語の格標示と分裂自動詞性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語の格標示と分裂自動詞性	6. 最初と最後の頁 1-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 5
2. 論文標題 人間の言語の特性と起源 - 一語文から二語文へ -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 琉球アジア文化論集	6. 最初と最後の頁 185-208
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 -
2. 論文標題 琉球語の多様性と島嶼性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 島嶼地域科学という挑戦	6. 最初と最後の頁 119-130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 8
2. 論文標題 言語から考える九州から琉球へのヒトの移動 - 語彙と文法から移動の時期を考える -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国際琉球沖縄論集	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 7
2. 論文標題 琉球語系統樹研究の方法と課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国際琉球沖縄論集	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nobuko Kibe, Hajime Oshima, and Masahiro Yamada	4. 巻 25
2. 論文標題 Plural Forms in Yoron-Ryukyuan and Address Nouns in Ryukyuan Languages	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	6. 最初と最後の頁 47-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木部暢子	4. 巻 119-12
2. 論文標題 消えゆく言語・方言を守るには	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 47-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shigehisa Karimata	4. 巻 9
2. 論文標題 The Linguistic Difference between Northern and Southern Ryukyuan from the Perspective of Human Movement	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 International Journal of Okinawan Studies	6. 最初と最後の頁 87-113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shimoji, Michinori	4. 巻 154
2. 論文標題 Information structure, focus, and Focus-Marking Hierarchies in Ryukyuan languages	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Gengo Kenkyu	6. 最初と最後の頁 1-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 4
2. 論文標題 音韻変化の体系性 - 音韻変化と音韻体系の再編	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 琉球アジア文化論集	6. 最初と最後の頁 111-135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ito T, Kimura R, Ryukoden A, Tsuchiya N, Murayama S, Ishida H	4. 巻 126
2. 論文標題 Computed tomography examinations of surface and internal morphologies of the upper face in Ryukyu Islanders and mainland Japanese population	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Anthropological Science	6. 最初と最後の頁 123-133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kimura R	4. 巻 98
2. 論文標題 Inferring population phylogeny from genetic data	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Senri Ethnological Studies (SES)	6. 最初と最後の頁 25-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村亮介	4. 巻 70
2. 論文標題 ゲノム情報から人類集団間交配を考える	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 生物科学	6. 最初と最後の頁 140-144
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 21
2. 論文標題 多良間方言の「中舌母音」はどんな音か	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 琉球アジア社会文化研究	6. 最初と最後の頁 27-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ito T, Kimura R, Ryukoden A, Tsuchiya N, Murayama S, Ishida H	4. 巻 126
2. 論文標題 Computed tomography examinations of surface and internal morphologies of the upper face in Ryukyu Islanders and mainland Japanese population	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Anthropological Science	6. 最初と最後の頁 123-133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1537/ase.180922	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kimura R	4. 巻 98
2. 論文標題 Inferring population phylogeny from genetic data.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Senri Ethnological Studies (SES)	6. 最初と最後の頁 25-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 8
2. 論文標題 琉球語系統樹研究の方法と課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国際琉球沖縄論集	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村亮介	4. 巻 70
2. 論文標題 ゲノム情報から人類集団間交配を考える	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 生物科学	6. 最初と最後の頁 140-144
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 4
2. 論文標題 音韻変化の体系性 - 音韻変化と音韻体系の再編 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 琉球アジア文化論集	6. 最初と最後の頁 111-135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久・島袋幸子	4. 巻 -
2. 論文標題 沖縄県国頭村奥方言の音韻体系	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究	6. 最初と最後の頁 41-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久・島袋幸子	4. 巻 -
2. 論文標題 沖縄県国頭村奥方言の名詞の格	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究	6. 最初と最後の頁 57-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shigehisa Karimata	4. 巻 9
2. 論文標題 The Linguistic Difference between Northern and Southern Ryukyuan from the Perspective of Human Movement	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 International Journal of Okinawan Studies	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shimoji, Michinori	4. 巻 154
2. 論文標題 Information structure, focus, and Focus-Marking Hierarchies in Ryukyuan languages	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Gengo Kenkyu	6. 最初と最後の頁 87-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 8
2. 論文標題 琉球語系統樹研究の方法と課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国際琉球沖縄論集	6. 最初と最後の頁 1~14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Chinatsu Irei, Takeo Okazaki	4. 巻 -
2. 論文標題 Comparative Verification of Clustering Effect in Household Model of University Student Construction for Various Targets	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Proceedings of International Technical Conference on Circuits/Systems, Computer and Communicatio	6. 最初と最後の頁 612-615
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木部暢子	4. 巻 119-12
2. 論文標題 消えゆく言語・方言を守るには	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 47-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木部暢子	4. 巻 35
2. 論文標題 富山の方言 - 砺波市方言の引用標識をめぐって -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 砺波散村地域研究所紀要	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木部暢子	4. 巻 -
2. 論文標題 隠岐の島方言の音韻	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 隠岐の島方言調査報告書	6. 最初と最後の頁 11-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 41
2. 論文標題 文献にみる首里方言の音韻変化	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 琉球の方言	6. 最初と最後の頁 225-238
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 3
2. 論文標題 琉球語那覇方言のduのとりたて性 - 琉球諸語に係り結びはあるか - 琉球語那覇方言のduのとりたて性 - 琉球諸語に係り結びはあるか -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 琉球アジア文化論集	6. 最初と最後の頁 25-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計56件 (うち招待講演 30件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 狩俣繁久、和智仲是、木村亮介、岡崎威生、大城璃功
2. 発表標題 語彙の分布からみる琉球諸語内の系統関係解明の可能性
3. 学会等名 言語系統樹ワークショップ (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 白田理人
2. 発表標題 喜界島方言の特徴 - 系統研究に向けて -
3. 学会等名 言語系統樹ワークショップ (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 重野裕美、白田理人
2. 発表標題 地域コミュニティと取り組む奄美大島方言のデータ収集・公開
3. 学会等名 日本言語学会第165回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 重野裕美、白田理人
2. 発表標題 北琉球奄美喜界島方言における人称代名詞を含む指示代名詞
3. 学会等名 広島大学国語国文学会2022年度研究集会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Shigehisa Karimata
2. 発表標題 Investigating Migrations from Kyushu into the Ryukyus through Language
3. 学会等名 Okinawan Studies and the Frontier for Ryukyuan Linguistics（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 狩俣繁久
2. 発表標題 言語系統樹でみた琉球諸語 - 理論と方法
3. 学会等名 沖縄言語研究センター
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Nobuko KIBE
2. 発表標題 Reporting on endangered languages and dialects in Japan
3. 学会等名 Their recording, conservation, and transmission, Japanese Studies Association of Australia (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 狩俣繁久
2. 発表標題 沖縄語那覇方言の焦点助詞と情報構造
3. 学会等名 沖縄言語研究センター
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松本和樹・岡崎威生
2. 発表標題 nグラムを利用した琉球諸語の定量化
3. 学会等名 第18回情報科学技術フォーラム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 白田理人
2. 発表標題 北琉球奄美喜界島志戸桶方言の条件文について
3. 学会等名 沖縄言語研究センター
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮城裕太・岡崎威生
2. 発表標題 音素素性による重み付けを用いた発音記号列のアラインメントと精度比較
3. 学会等名 第18回情報科学技術フォーラム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 狩俣繁久
2. 発表標題 消滅危機言語の記述文法は誰のために行うか
3. 学会等名 沖縄言語研究センター
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 白田理人
2. 発表標題 疑問詞疑問文とその周辺 喜界島方言・奄美大島方言のデータから
3. 学会等名 沖縄言語研究センター
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木村亮介
2. 発表標題 人類集団の起源と変遷～古代の劣性遺伝性疾患など様々な角度から見つめる～
3. 学会等名 第46回日本マススクリーニング学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 木村亮介
2. 発表標題 琉球列島人の集団ゲノム研究
3. 学会等名 第21回日本進化学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 狩俣繁久
2. 発表標題 音韻の変化と音声の変化
3. 学会等名 沖縄言語研究センター
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 狩俣繁久
2. 発表標題 奥方言の動詞活用のタイプから北琉球語の活用のタイプを考える
3. 学会等名 沖縄言語研究センター
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KARIMATA Shigehisa
2. 発表標題 The Possibilities of Phylogenetic Tree Studies in Ryukyuan Languages
3. 学会等名 Collaborative and Public Symposium “Research “Possibilities and Challenges for Linguistic Studies in the Island Regions (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 狩俣繁久
2. 発表標題 琉球列島への人の移動 2 回仮説の意味すること
3. 学会等名 新学術領域ヤポネシアゲノム言語班第2回研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KARIMATA Shigehisa
2. 発表標題 Investigating migrations from Kyushu into the Ryukus through language , dating migrations based on grammatical and lexical evidence
3. 学会等名 The 2nd NINJAL-UHM-SGRL linguistics workshop: Grammatical descriptions of endangered and understudied languages in East Asia and Beyond (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 狩俣繁久
2. 発表標題 人間言語の起源
3. 学会等名 沖縄言語研究センター
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 重野裕美・白田理人
2. 発表標題 北琉球奄美大島方言及び喜界島方言の尊敬動詞の意志勧誘形について
3. 学会等名 沖縄言語研究センター
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木村亮介
2. 発表標題 集団ゲノム学：理論、実践および応用
3. 学会等名 全ゲノム解読で迫る生態学（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 狩俣繁久
2. 発表標題 琉球語の動詞活用形の歴史的变化
3. 学会等名 フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 狩俣繁久
2. 発表標題 琉球語研究における系統樹研究の可能性
3. 学会等名 フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金田章宏
2. 発表標題 八丈語の動詞形態論 古層の保持と変化
3. 学会等名 フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 日本語と琉球語の成立をさぐる - アクセントの比較対照から -
3. 学会等名 第72回日本人類学会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nobuko Kibe, Tomoyo Otsuki and Kumiko Sato
2. 発表標題 Intonational Variations at the End of Interrogative Sentences in Japanese Dialects: From the "Corpus of Japanese Dialects"
3. 学会等名 LREC2018, (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 下地理則
2. 発表標題 日琉諸語の複数表示のパターンとその類型化
3. 学会等名 第107回日本方言研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 白田理人
2. 発表標題 北琉球奄美喜界島小野津方言に見られる呼称末尾の母音長の交替
3. 学会等名 日本音声学会第32回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Matsuoka, Aoi, Hiroshi Miyaoka, and Michinori Shimoji
2. 発表標題 I'm afraid of thunder: the dative stimulus construction in Japanese dialects
3. 学会等名 Endangered Languages in Japan and Northeast Asia, Description, Documentation and Revitalization (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金田章宏
2. 発表標題 八丈語・東日本方言と南琉球諸語 - 周圏分布的視点から -
3. 学会等名 類型学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 下地理則
2. 発表標題 方言研究と総合的記述
3. 学会等名 日本語学会春季大会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 狩俣繁久
2. 発表標題 語彙と文法から探る琉球語の南北差と九州からのヒトの移動
3. 学会等名 シンポジウム「九州 - 沖縄におけるコトバとヒト・モノの移動」(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 狩俣繁久
2. 発表標題 琉球語研究のこれまでとこれから
3. 学会等名 沖縄言語研究センター（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 KARIMATA Shigehisa
2. 発表標題 Kyushu dialects and the difference between Northern and Southern Ryukyuan languages
3. 学会等名 NINJAL International Symposium Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization. National Institute for Japanese Language and Linguistics (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 狩俣繁久
2. 発表標題 琉球語の成立過程から見た琉球列島へのヒトの移動の波
3. 学会等名 公開シンポジウム「言語・古人骨・交易/農耕・歴史背景から中世における琉球列島へのヒトの移動を探る」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金田章宏
2. 発表標題 八丈語の動詞形態論 古層の保持と変化
3. 学会等名 シンポジウム「フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 KANEDA, Akihiro & Martin HOLDA
2. 発表標題 Hachijo and South Ryukyuan languages and East Northeast Japan dialects from the viewpoint of the concentric circle theory of dialect divergence
3. 学会等名 Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia:Description, Documentation and Revitalization (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金田章宏
2. 発表標題 八丈語・東日本方言と南琉球諸語 - - 周圏分布の視点から -
3. 学会等名 類型学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 KARIMATA Shigehisa
2. 発表標題 Investigating migrations from Kyushu into the Ryukus through language: dating migrations based on grammatical and lexical evidence
3. 学会等名 The 2nd NINJAL-UHM-SGRL linguistics workshop: Grammatical descriptions of endangered and understudied languages in East Asia and Beyond University of Hawai'i (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 KARIMATA Shigehisa
2. 発表標題 Kyushu dialects and the difference between Northern and Southern Ryukyuan languages
3. 学会等名 NINJAL International Symposium Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization (招待講演)
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 狩俣繁久
2. 発表標題 語彙と文法から探る琉球語の南北差と九州からのヒトの移動
3. 学会等名 九州-沖縄におけるコトバとヒト・モノの移動
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 日本語と琉球語の成立をさぐる - アクセントの比較対照から -
3. 学会等名 第72回日本人類学会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 Accent systems in Japanese dialects
3. 学会等名 NINJAL International symposium (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 危機言語の記録・保存・復興
3. 学会等名 沖縄言語研究センター40周年記念シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 Intonational Variations at the End of Interrogative Sentences in Japanese Dialects: From the “Corpus of Japanese Dialects”
3. 学会等名 Special Session, LREC-2018 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 KARIMATA Shigehisa
2. 発表標題 The possibilities of Phylogenetic Research on the Ryukyuan Languages
3. 学会等名 Futue Perspective for island Society:Sustainability and Self-Management . RETI (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 狩俣繁久
2. 発表標題 琉球語の南北差とヒトの移動
3. 学会等名 言語と文化と遺伝子からみた琉球列島への人の移動
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 Plural Forms in Yoron-Ryukyuan
3. 学会等名 The 25th Japanese/Korean Linguistics Conference
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 方言のある暮らし - ことばは文化の源 -
3. 学会等名 人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト 研究集会「地域文化をはぐくむ」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 諸方言コーパスに見る男性の言葉・女性の言葉
3. 学会等名 コーパスに見る日本語のパリエーション 話者の属性
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 諸方言の文末イントネーション - 日本語諸方言コーパスから -
3. 学会等名 音声資源活用シンポジウム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 ことばが接するところ - 富山の方言 -
3. 学会等名 砺波散村地域研究所例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木部 暢子
2. 発表標題 日本語諸方言コーパスに見る富山方言
3. 学会等名 富山大学人文学部 第6回言語学・日本語学公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木部 暢子
2. 発表標題 Outline of 'Endangered Languages and Dialects in Japan': NINJAL's research project
3. 学会等名 NINJAL/NMJH/UHM Workshop Underdescribed Languages and Histories: Linguist's and Historian's Challenges
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Shimozi Michinori	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Brill	5. 総ページ数 341
3. 書名 An Introduction to the Japonic Languages	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	木部 暢子  (Kibe Nobuko)  (30192016)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・言語変異研究領域・特任教授   (62618)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	金田 章宏 (Kaneda Akihiro) (70214476)	千葉大学・大学院国際学術研究院・教授  (12501)	
研究分担者	下地 理則 (Shimoji Michinori) (80570621)	九州大学・人文科学研究院・准教授  (17102)	
研究分担者	白田 理人 (Shirata Rihito) (60773306)	広島大学・人間社会科学研究科(教)・准教授  (15401)	
研究分担者	津村 宏臣 (Tsumura Hiroomi) (40376934)	同志社大学・文化情報学部・准教授  (34310)	
研究分担者	木村 亮介 (Kimura Ryosuke) (00453712)	琉球大学・医学(系)研究科(研究院)・准教授  (18001)	
研究分担者	岡崎 威生 (Okazaki Takeo) (90213925)	琉球大学・工学部・教授  (18001)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	和智 仲是 (Wachi Nakatada)	琉球大学・熱帯生物圏研究センター・助教  (18001)	

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------